

好きなこと

福島県会津若松市立湊中学校

二年 加藤 凜 桃

「好きなことをやりなさい。時間は限られているんだから。」

確かに。私も、父の言葉に賛成だ。だから、私は最近、ギターを始めた。小学六年生の冬、私は、音楽のとりこになった。別に、歌うのは上手じゃないし、小さい頃に習っていたピアノだって下手くそだ。卒業式の合唱の練習や、ピアノの演奏がうまくできなくて、泣きながらやって、みんなを困らせていた。不器用だから、できないことが多々あったし、話を理解できず、友達をイラつかせてしまうこともある。そんな私を励まして、力になってくれたのが、音楽。音楽の中でも特にロックやHIPHOPが好きだ。激しいドラムのリズムが心拍数を正常に戻してくれて、ギターのメロディーが血液を滞りなく流してくれる。ベースの低音が筋肉から骨の髄まで響き、歌詞は栄養となり元気をくれる。そんな音楽が大好きだから、ギターを始めた。

ギターの練習はとても楽しい。単純に、正しい音が弾けるだけでうれしい。アンプから自分が弾いたギターの音が出ると体が震える。うれしさのあまり震えているのか、爆音のあまり震えているのか……。そんな「好きなこと」をやっているとき、ふと、

二年前のことを思いだした。その体験は、今後も忘れないだろう。

私は幼い頃からスポ少でバスケットをやっている。毎年、会津の上位で、何度も、県大会出場経験のある強豪チームだ。そのため、練習はとても辛かった。

六年生のとき。三年連続県大会出場がかかっていたため、プレッシャーが大きかった。そして、そんな大事なときに、私は上達を感じられず、バスケットに楽しさを感じられなかった。だから、以前から行っていた「自主練習」は「毎日、父との猛特訓」となった。

火・木・土曜日にスポ少の練習があり、その日以外は、猛特訓の日となった。小学校の体育館を借りて、主にドリブルとシュートの練習。スポ少の練習は疲れるので、猛特訓の日は、あまり走らないメニューにしてある。しかし、学校に行つて、五時に家に帰り、少し寝て、夕食を食べて、七時から特訓をして、八時半に帰つてきて、宿題をして、十時に寝る。六時半に起きて、学校に行つて、五時に家に帰り、少し寝て、六時に小学校へスポ少の練習へ行き、九時に家に帰り、宿題をやって、十一時には寝る。それが繰り返された日々は、なかなか大変なものであった。

たおれるほどのハードスケジュールではないが、「家でだらだらしたいな。」なんて自分ばかり……。と、精神的に参ることがあった。それでも、「上手になれば、楽しくなる。」

父の言葉を胸に、私は日々の特訓を頑張った。

そして、県大会につながる、大事な地区大会となった。結果は四位。県大会へ進むことができなかった。むしろくしゃした。結果は全然気にしていない。自分のプレーができなかった。なんか、できなかった。毎日、練習したから、もっと上手になっているはずなのに、納得するプレーが全くできなかった。そし

て、清々した。「家でだらだらする時間ができた。もう、特訓は終わった！」そう思った。妥協もした。「自分はあるなりに頑張ったじゃないか。」自分を美化しすぎた。「もともと上手じゃなかったから、よくやった方じゃないのか？」自分に問いかけた。後悔もした。「やつぱり、もうちょっと頑張ることができたんだ。」「自分に甘かった。」自分の行動を見つめ直した。いろいろな感情が、次々とあふれだし、しばらく悶々とした日が続いた。

今となつては、この出来事が糧となっている。いつも特訓に付き合ってくれた父に感謝している。

今は好きなギターも、いつしかスランプになるかもしれない。今は考えられないが、ギターが楽しくなくなるかもしれない。そのときがきても、決して、ギターを手放さないようにしよう。「好きなこと」を見つければ、「好きなこと」ができる日々感謝しよう。楽しさやうれしさ、喜びを胸に刻もう。そして、たくさんの経験をしよう。楽しいこと、大変なこと、悲しいこと、うれしいこと、たくさんを知っている人は魅力的だと思おう。魅力的な人が弾くギターはきつと魅力的だろう。だから、バスケットの日々も今につながっていたんだ。たくさん感情を知ることができたから。

これからも、たくさんさんの経験をしよう。そうやって、大切に、「好きなこと」を育てていこう。私は今日も震えている。